

久しぶりにホントに口惜しくて、地団駄を踏んだ。

ある自治体の敷地内で利用者の遺失物の財布から3万円が抜き取られた。自治体は、委託清掃の事業者を問いただし、事業者は従業員に問い合わせた。直後、一人の従業員が、3万円を持って名乗り出た。事業者は被害者に謝罪し、被害者も自首を受け入れ、事業者に寛大な措置を申し添えた。しかし、まもなく、自治体は、この件を指名停止委員会の議題に乗せ、即刻、事業者は二ヶ月の指名停止に処せられた。その期間は、ちょうど次年度のこの現場の入札時期に遭遇していたので、この事業者は入札にさえ参加できなくなった。事業者は不服の意を表したが、不服申し立ての制度さえなく、処分は敢行された。この従業員は謹慎処分になるが、同僚が等しく仕事を失う事態におののいた。数十名の従業員は、この青天の霹靂に肝を潰した。

この従業員がホームレスから就労支援事業を経て就職した経緯から、ボクに相談が舞い込んだ。ボクは、自首と示談という経緯に依拠して「寛容」を求めて奔走したが、徒労に終わった。「自首しても、示談でも犯罪は犯罪。委託労働者も公務現場で職に就いた以上、公務員と同等のリスクを負う。事業者が、好んでホームレスを雇用した以上、寛容の余地はない」。自治体幹部の自己防御の回答がボクの記憶に鮮烈に残った。幾人かの識者に問い合わせたが、「せんないこと」とむしろ諭された。ボクは悶々とした。

自首した従業員が哀れだった。ボク達が就労に導いた知的障害者や元ホームレスの境遇に胸が詰まった。

ボクは、反転攻勢を誓った。高野連も不祥事への処分のあり方を問い直しているのに、こんなに簡単に労働者が仕事を失っていいはずはない。常軌を逸した価格競争に放り込んでおきながら、それでもホームレスや障がい者の雇用に取り組もうという委託現場の奮闘を一顧だにしないという態度には我慢ができない。短期の委託契約で、しかもまったくの価格競争での入札では、労働者は働き続けられる保障を得られないし、賃金は下落の一途を辿る。自治体は、信頼関係を築くまもなく変わる委託事業者を規則で縛り、緊張感が高まることを承知しているから、詳細なマニュアルを作成し、指名停止で脅す。見事なコンプライアンス(法令遵守)だ。しかし、自治体は、そこに働く委託労働者を萎縮させ、「せんない想い」にさせていることを知らない。

ボクは、『なび』の読者にも問いかけたい。低賃金でも、不安定雇用でも、法令に脅かされても、それでもなお、「はたらく」意味(尊厳)を問いかけることは「せんないこと」だろうか?ボクは、この事件を手がかりに、自治体の最先端で問いかけられた「はたらく尊厳」についての「研究会」を近く発足させたいと思っている。読者の参加を期待しています。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



これは、やっぱり「せんないこと」なのだろうか?



# hidarimakiの 二の逸曲



加藤和彦の音楽は都会的センスがあふれている。フォーク・クルセダーズ時代から北山修との共作にもそれが際立っていた。古くは「帰ってきたヨッパライ」や「悲しくてやりきれない」「あの素晴らしい愛をもう

いちど」で、当時の僕らの心を強くつかんだ。スマートな音楽づくり、社会への訴求力、新しい音への真摯な挑戦は真のアーティストと言えるだろう(最近ではミソクソ芸能人をアーティストと呼ぶ傾向が大変うっとうしい)。有能なわりに加藤のカゲが薄いのは、商業的なアピールに関心がないのかもしれない。

アルバム「黒舟」はすごい。後にYMOを結成する高橋幸宏や、ギタリストの高中正義、ベーシストの小原礼らが脇を固めたこのアルバムは、74年、経済成長とともに音楽が資本に取り込まれていく中で生まれた。その音楽的閉塞を打ち破るような意気込みでつくられたのが本作であったと思う。加藤は自らの音楽をまさに黒舟の到来にみたててイメージしたのではなかったか。

A面イントロを経て、加藤のボーカルをなぞるようにバ

ックボーカルが朗読者のごとく語りかけてくる「墨絵の国へ」の実験手法が素晴らしい。そして3曲目「タイムマシンにおねがい」は空前のヒット作となった。

——さあ不思議な夢と 遠い昔が好きなら さあそのスキッチを 遠い昔に廻せば ジュラ紀の世界が拡がりそこははるかな化石の時代よ アンモナイトはお昼ね ティラノザウルスお散歩アハハ——

ノリのよいポップスで、子どもまでもが身体を揺らしてロックンロールする感覚だ。これまでの邦楽では見当たらなかった湿感のないおおらかさがあった。軽快なミカのボーカルの背景からかなりヘビーな演奏が迫ってくる。愛嬌があつて僕の大好きな逸曲だ。このあとアルバムタイトルとなった「黒舟」が挿入され—嘉永六年六月二日／嘉永六年六月三日／嘉永六年六月四日—の三曲で構成されている。全曲がインストルメンタルで組曲のようになっている。タイトルはいうまでもなく米提督ペリーが浦賀に出没した時期を示した。プログレッシブ(進取的)でジャズ要素を持ち、ピンクフロイドを彷彿させるドラマチックな曲が聞けるのだ。

A面がロックセンスのピカイチだとすれば、B面は「どんたく」に代表される歌謡的ロックンロールあり、「四季頌歌」のように日本の叙情を歌った作品が並び、豪華絢爛なアルバムに仕上がった。邦楽の収穫といえる名作だろう。

h i d a r i m a k i

この記事が脱稿した直後、加藤氏の訃報を聞いた。無念。

アサヒ  
イデオ  
ムス  
マシ  
ンに  
おね  
が  
い  
バ  
ン  
ド  
の  
逆  
襲  
その  
29  
「黒舟」から